

第211回くらしの植物苑観察会 2016年10月22日(土)  
-野生きのこの見分け方・暮らし方入門-

-きのこを通して森をみる-

吹春 俊光(千葉県立中央博物館 主任上席研究員)

〈きのこで森を管理した里山〉

約4億年前に植物は水圏から陸圏へ上陸を果たしました。陸上の環境は乾燥していて過酷。そのため植物は菌類と合体し、陸の植物は菌類との共生体となったのです。その構造は「菌根」とよばれます。約4億年の間にその菌根装置はいくつかのバージョンアップを果たしましたが、現在でも、ほとんどの陸上植物は菌類と共生し、菌根に頼ってくらしています。すなわち共生相手の菌類には、植物は光合成産物の何割かを投資し、菌を養い、見返りに窒素やリンなどの無機塩類そして水をもらう暮らしをしているのです。森の植物は菌類無しでは生きていけません。



このような視点で、房総の森の姿をみていくと面白いことがわかります。江戸時代頃から房総半島は、ほぼマツ林に覆われています。江戸時代の浮世絵や、明治頃の房総の風景絵葉書をも、ほとんどアカマツ・クロマツ林。しかしマツは伐採の跡等に生える二次林。数十年後には、また元のシイ・カシ林にもどっていくはずですが。しかしその不安定な二次林であるマツ林を何百年間も安定的に維持管理してきた秘密。それは、二次林内を適切に管理し、林内のきのこ相をコントロールし、共生相手のマツを元気に健康に保ってきたからなのです。

図の説明：市川市国府台付近の植生の今昔

市川市真間から里見公園付近の植生の変遷。江戸川から眺めると、明治・大正時代の絵葉書にも立派なマツがみられる。江戸時代に描かれたこの地の多くの浮世絵にもマツが描かれている。しかし手入れをされなくなった、すなわち「きのこ」によるコントロールを失ったマツ林は、次第に元の植生にもどり、現在では房総の自然植生であるシイ・カシの常緑広葉樹林にもどってしまっていることがわかる。

(上図)：市川名所、鴻之臺公園ヨリ古戦場鐘掛松ヲ望ム、(下図)：現在の国府台。

次回予告 第212回くらしの植物苑観察会 2016年11月26日(土)

「明治時代の菊ブーム」 平野 恵(台東区立中央図書館)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合申込不要